

報 会

平成27年度
会報第2号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

平成二十七年度を振り返って

鹿児島市立紫原中学校
副会長 川畑映一郎

平成二十七年七月、「明治日本の産業革命遺産」として、旧集館事業に関連する三つの構成資産が世界文化遺産に登録されました。また、第三十回国民文化祭が、本県各地を会場にして実施され、音楽や芸術・伝統関係のイベント等が盛大に開催されました。日本文化や郷土文化、食文化に触れ、参加した方は十分楽しめたのではないのでしょうか。同時に我が国と郷土を愛する態度を養い、よりよい社会づくりに一層努めていく大切さを再認識しました。さて、私たちの教育を取り巻く状況は、社会情勢と同様に確実かつ急激に変化してきています。

政府も教育再生実行会議等の中で教育改革を推進しています。特別な教科として位置づけられた「道徳」、学力向上の具体的な取組、土曜授業の実施等、様々な視点から地域・家庭と連携しながら創意工夫していくことが課題解決につながると考えています。ところで、本県教頭会では、平成二十七年八月四、五日に第五十五回九州地区公立学校教頭会研究大会を第四十九回鹿児島大会として鹿児島市で開催しました。第十期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」のもと、本年度は第二年度の発表でした。九州各県から集まっ

ていただき、五課題七分科会において、それぞれが取り組んできた研究実践をもとに、教育課程、子どもの発達、教育環境整備、組織運営、教職員の専門性等について、教頭としての関わりを中心に活発な協議・意見交換を行いました。また、鹿児島市維新ふるさと館特別顧問の福田賢治先生が「維新改革者に見るリーダー性と創造性」の演題で講演をされました。維新改革者を中心とした具体的な話を通して、私たちがリーダーとして備えるべき資質はいかなるものかを示唆していただき、貴重な時間を共有できたことに大変喜びを感じています。

最後になりましたが、公務御多用な中、御指導・御助言いただきました各市町村教育委員会、連合校長協会、関係機関の方々、並びに本会の運営に携わってくださいました皆様方に、会員一同心から感謝とお礼を申し上げます。



鹿児島県公立

小・中学校教頭会役員をして

鹿児島市立吉野小学校
副会長 坂口利一

年度末を迎え、先生方には、今年度のまとめと来年度の準備で大変忙しい日々をお過ごしのことと存じます。さて、昨年夏に第四十九回鹿児島県公立小・中学校教頭会研究大会並びに第五十五回九州地区公立学校教頭会研究大会を鹿児島市で開催し、九州各県から約千五百名の参加を得て、二十一本の提言をもとに研究協議が行われました。グループ協議では、活発な意見交換を通して、教頭同士のネットワークの輪を広げる貴重な場となりました。大会後のアンケート等では、本県教頭会の連携のとれた運営態勢や研究大会への取組等、他県から素晴らしい評価をいただくことができました。このことは、これまでの各地区での研究の蓄積の成果であります。本大会で得たことが一つでも各学校で具現化されることを願っています。

また、本県教頭会では、今年度も各種研修会に参加して広く情報を収集し、会報やホームページの充実を図りながら、会員の連携強化に努めてきました。さらに、情報発信の充実に努力していきます。あわせて、教頭の処遇改善に向けて、実態調査等をもとに、全国公立学校教頭会と連携して、県連合校長協会へ働きかけを行ってきました。今後も引き続き努力を重ねていきたいと考えております。最後になりますが、教育界では、チーム学校の推進による組織的な教育力の充実、アクティブ・ラーニング充実による思考力・表現力等の育成、特別の教科道徳の取組など様々な改革が進められています。学校においても、いじめや不登校の問題など多くの課題があります。今後、教頭同士が連携を深め、日々研究と修養に努め、より良い学校教育の牽引者としてリーダーシップを発揮できるよう努力を重ねていきます。各地区の教頭会がますます発展することを祈念いたします。

新任 教頭 雑感

十島村立悪石島小中学校

川上嘉一

本校は、トカラ列島の有人島七島の一つ「悪石島」にある唯一の学校である。悪石島は、数年前からテレビ番組等で度々紹介されており、「第三十回国民文化祭」で披露された「ボゼ」が登場する盆踊りは、県の無形民俗文化財に指定されている。豊かな自然の中、島民たち

が助け合いながら生活している素敵な島である。そんな悪石島に赴任が決まった当初、期待と不安で一杯だった。

中学校で勤務してきた私にとって、初となる小中併設校。全児童・生徒数は八名、全島民数は七十名。今までにない経験・教育活動ができるのではないかとわくわくする気持ちと、教頭という立場での赴任に対する重責感が心の中で渦巻いていた。そんな私を迎

えてくれたのは、笑顔あふれる子供たち、気遣いあふれる島民たち、そして学校長以下の頼れる仲間たちであった。着任から早や九か月。日々、学びの連続である。

公文書整理や報告物提出等の教頭としての業務、専門外の業務、そして一島民としての地域行事への参加。

本当にあつという間の九か月であった。「しんどい」と思うことも確かにある。しかしそれ以上に「やりがい」を感じることができるようになって

きた。それは、周りの人たちの支えがあったからである。「人と人との繋がりの大切さ」こそ、悪石島に赴任し、私が一番学び、再確認したことである。まだまだ未熟な教頭であるが、いつの日か、子供たちを、学校を、地域を支えることができるよう、これからも学ぶ姿勢を忘れずに日々を過ごしたいと考える。

「己以外は皆師匠」の言葉を座右の銘として。

鹿屋市立鹿屋東中学校
田中準章

教頭と呼ばれるようになって十ヶ月が過ぎた。自分の立場にも少しずつ慣れてきた。

本校は生徒数八百一十五名、職員数五十八名の大規模校である。生徒は年々増え続け、二年後は九百名、七年後は千名を超える見込みである。

そのため昨年度から二人教頭制となった。私はここに第二教頭として着任した。新米

教頭の私にとって先輩教頭が隣にいるのはとてもありがたい。生徒数が多い分、課題も多く、次から次へと事件や事故も起こる。各学年からいろいろな情報が寄せられる。職員からの相談もある。一つの業務に対する処理量も大きい。地域や保護者からの御意見も結構いたただく。これらを一人で役割分担しながら、対処している。ほとんどが私にとって初めてのことであり、判断に迷うことや分からないことも多い。そんな時、いつでも相談できても助

かっている。一方、頼りすぎたり、遠慮したりしてしまう自分がいる。他の教頭先生方は全てを一人でこなし、対応していることを考えると、いつまでも半人前でスキルの上がらない自分が不安になる。それでも鹿屋東中に赴任できて良かったと思っている。いろいろな経験ができ、毎日が刺激的で楽しい。野球部に副顧問として関わっていることもあるかもしれない。とにかく今の環境との出会いに感謝して、精一杯頑張りたい。これまで

の全ての出会いのおかげで「今の自分」がある。そこに今の出会いが加わって「未来」をより豊かなものにしてくれる。

これからも全ての出会いに感謝して、前へ前へと進んでいきたいと思う。

随
想

高い目標に向かって

長島町立城川内小学校

有村修一

教頭職についてから、「組織」という言葉をどうしても意識しなければならぬ場面遭遇することがある。

しかしながら、自分自身がそれをどれだけ意識して過ごしてきただろうかと思えば、反省することも多い。担任をしていた頃は、どうして学級の中から学校全体を見ていて、今思うと学校全体が見えていなかったように感じる。

また、今の立場から見ると、各学級の様子を日々の授業等を通して見ているようで、意外と気付いていないことも多いように感じる。人それぞれ立場で、ものの方や感じ方が随分違うものだと感じる。

また、立場が代わることで、見える世界も随分違うものだと実感することが多くなってきている。学校は、常に職員が入れ替わるこ

とで活性化していく職場でもある。実際は、人が入れ替わり、校務の担当が代わることで戸惑うことも多いが、立場や見方を変えるという点では、活性化のチャンスと捉えることもできる。常に高い意識をもった職場になることを目指していきたい。

教頭という役割を与えていただいて、時には思うようにはいかず、悩むことも多い立場であるが、それ以上にやり甲斐を感じることもできる立場でもあることをようやく実感できるようになってきた。

授業をとおして、子どもに力を付けることのできる教師を育てると同時に、自分自身を高めながら、風通しの良い職場でありたいと思う。一人一人が自分の役割を自覚し、一体となって取り組むような職場環境は、根気強く取り組んで作り上げていくものだと思うが、未だ達成できていない。常に自分の目標として、これからも取り組んでいきたい。

マンダラチャート

鹿児島市立天保山中学校

竹崎賢一

大谷翔平とは、つくづくすごい人間である。わざわざ「人間」としたのには意味がある。人間として、すごいのである。

大谷選手が、花巻東高校一年生の

頃立てた目標達成表(マンダラチャート)を見たことがある。

一番の目標である「ドラフト一位で八球団から指名」を達成するために、具体的な達成の要素として「コントロール」「スピード百六十km/h」など八つが設定されているのだが、興味深いのは、そこに「人間性」「運」という要素が設定されていることである。さらにそれぞれの要素に対して、八つの具体的な目標行動が設定してあるのだが、「人間性」に対しては「思いやり」「感謝」など、「運」に対しては「ミシ拾う」「審判さんへの態度」などといった行動を意識していることである。

繰り返しですが高一の生徒がである。しかし、今の大谷の姿を見ると、それら行動は全て実行されたのであろうと思う。類い希なる能力に

恵まれ、人間性にあふれ、運までも味方につける。すごいといしか言い様がない。

伝えたいのは大谷選手の話ではなく、大谷を育てた花巻東高校野球部の佐々木洋監督の話である。監督のモットーは「野球選手を育てるのではなく、野球ができる立派な人間を育てる」。また、こんなことも言っている「わたしは百六十km/hのボールは投げられない。しかし、百六十km/hを投げるために、しなければならぬことを伝えることはできる」と。

この師ありて、あの教え子あり。指導とはかくあらまほし。まず、己のマンダラチャートを考えてみよう。今からでも遅くはないと願いつつ。

私の勧める一冊の本

超バカの壁

著者 養老孟司

発行所 新潮社

鹿児島市立原良小学校

雪丸堅

昨年のいわゆる「父の日」に『超バカの壁』を中二の三男坊から贈られた。伊集院の本屋まで

牛耳っている「バカな自分」がこの「問題」を意識の彼方へ笑い飛ばした。ものは考えようなのだ。気にしない。(私はバカではあるが、自己内対話における「バカの壁」はかなり低くもろいようだ。)

この本は、『バカの壁』『死の壁』という、既刊の二冊を読んだ読者からの相談に答える形で作られている。各章がそれぞれ読みきりの形になっている。どの章から読んでもかまわない。どの章もおもしろい。自分の問題や男女の問題、子供の問題、テロの問題や戦争責任の問題と、十二の章において著者の考え方・見方が深刺と記されている。もの考え方が、見方の多様性や奥深さを十分に堪能できる。全体の筋を追う必要もないので、たいして読解力も要しない。(愚息ながら、贈る相手を考えて選書力は侮れない。この本に生き方の「答え」を期待するのは野暮である。

自分の生き方を決めるのは、自分自身だ。著者も「いくら本を書いて、考えるのは私ではなく、読者である。(中略)私の考えが、皆さん参考になれば幸いである」とあとがきで述べている。読んで答えを得るところか参考にもならなかったと憤ることなかれ。自分にとって無意味で価値がないことが明確になったと愉しむ大人でありたい。(教頭が「無

私の修行」の在り方を愉しむように。)

どんな問題も「チーム」で解決する ANAの口ぐせ

著者 ANAビジネス

発行所 ソリユーション

南種子町立中平小学校

有村暢

◆ たったひと言の「おせっかい」を加えるだけで、お客様との距離が縮まる

◆ たったひと言の「雑談」がきっかけで、上司や部下との人間関係がよくなる

◆ たったひと言の「基本」を徹底するだけで、仕事の成果が上がる

◆ みんなの知恵を集めて成果を出す「チーム戦」でないと生き残れない時代が来ている

◆ 「頑張ればなんとかできるかも」「助けを求めると情けない」ANAの社員たちは、こういった自分のプライドよりも、成果が重要であると理解している

◆ 小さい事ほど丁寧に！当たり前前の事ほど真剣に！

◆ 信頼は「当たり前」の積み重ねでしか得られない

◇仲良しチームはいいチームではない

本書「どんな問題も「チーム」で解決するANAの口ぐせ」からの引用である。企業の再建策や経営努力が、すべて学校経営に生かせるわけではないが、「チーム学校」を標榜し構築しようとする自分にとっては、指針となる点が多々あり、随所で「うん、じゃっどー」と首肯できた。ワンマン経営者やカリスマ教諭が引ッ張っていけば、学校・学年・学級経営も何とかなる、というのは、もう過去のことと言っても過言ではない。

難局や課題を一人で抱え込んでいては、取り返しのつかないことになってしまう。「チーム学校」としての組織体をいかに整えていくか、いかに機能させていくか、といったマネジメントを柱に、日々の教育活動の改善と活性化を図っていく必要がある。

TEAMANAに脈々と受け継がれる「おせっかい文化」は、大企業の再建と成長につながっている。これは、一人一人の社員の心がけと実践、そしてチームとしてまとまるための仕組みづくりとその弛まぬ改善の積み重ねである。チームで成果を出し「チーム学校」を創っていくためのリーダーシップを發揮していきたいものだ。

自由投稿

「教頭職のやりがい」

始良市立竜門小学校

吉 留 巧

竜門小学校には、樹齢九十五年、高さや幅が十五m以上はあるうかという見事な円錐形の大銀杏が葉を広げている。

昨年の竜門小の運動会にあわせて、関東近辺に居を構えた七十歳前後の校区出身者の方々が三十名程、数十年ぶりに帰省された。その方々が「竜門の景色も校舍も変わりました。でも、小学校の思い出は心の拠り所です。銀杏も昔と同じ場所にあります。懐かしいですね。」と話された。

運動会当日、同級生や友人と童心に戻りにこやかに談笑されているのを見て、こちらも暖かい気持ちになった。

教頭として地域の方々と触れ合う機会がある。いつしか話題が、昔の学校や地域・校区の話になる。改めて、学校は地域の強い思いによって支えられていることを感じる。

教頭として、地域の思いを

学校の運営に生かしているのか、継続的になるよう企画できているか、仕掛けをしているのか問われている。そこに教頭職としての大きなやりがいがあると思う。他にやりがいとして児童生徒や教職員の実績が見られた「学校の課題が職員との協働により解決した」「地域から感謝やよい評価が寄せられた」「職員から頼りにされていると感じた」等であろうか。

教職員や児童生徒と教育課程を進める過程で達成感や成就感を味わえるのが教頭職であり、保護者や地域からの信頼をいただくことがやりがいに繋がると考えている。

「教頭職を生きる」

南九州市立別府小学校

猪野 祐介

まだ足下の暗い道を学校まで歩く。校舎のセットを解除して、昨日施錠した所を確かめながら学校内の鍵を開けて

いく。途中ようやく顔を見せる朝日に「日の無事を祈る。毎朝同じ手順で二つ二つ開錠しながら、私は頭の中で「ある人の言葉を反芻している。春、桜の下には多くの人が集い、その美しさを愛でていますよね。当然ですが、桜は自らを認めてもらうために咲いているのではありません。桜は自らの命を懸命に生きているだけ、それを人々が勝手に美しいと感動しているのです。僕もその一人です。年離れた母は夏の甲子園が大好きです。彼女は毎年高校球児から感動をも

らつてると言うけれど、実は違います。あの暑い球場で球児は懸命にプレーしているだけ。僕らは勝手に感動しているのです。桜や高校球児達のように、誰に認めてもらうでも評価してもらってもなく、僕は僕のやるべきことを懸命にやってきたい。そう思っています。

夕方、全職員が退庁したのを見届けてから校舎内の施錠を確認して回る。朝とは逆の手順で二つ二つ業務を終了していく。暗い門をくぐり家路につくと、私はその「ある人」のおかげで自らの命を懸命に生きている実感を持つことができるのである。

